

2012年3月1日

主催（公財）ミズノスポーツ振興財団

「2011年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

（公財）ミズノスポーツ振興財団では1990年度より「ミズノ スポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

3月1日（木）、グランドプリンスホテル高輪で2011年度選考委員会を開催し、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

なお、この「ミズノ スポーツライター賞」の表彰式は、4月25日（水）にグランドプリンスホテル新高輪で行います。

【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】

該当作品無し

【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】（トロフィー、副賞50万円）

- ・「TOKYO オリンピック物語」 野地秩嘉（小学館）
- ・「最後の王者」 西村 章（小学館）
- ・「独立リーグの現状 その明暗を探る」 産経新聞社

詳細は別記の通りです。

（お問合せ先）

公益財団法人ミズノスポーツ振興財団事務局 内橋 TEL. 03 (3233) 7009
ミズノ株式会社 広報宣伝部 東京広報課 小林 TEL. 03 (3233) 7037

記

名 称：2011年度 ミズノ スポーツライター賞

制 定 目 的：スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰し、
スポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの
若手スポーツライターの励みになる事を願い制定

選 考 対 象：主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・
ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの

選 考 委 員：委員長 岡崎 満義 氏（元㈱文藝春秋取締役、「Number」初代編集長）

委 員 杉山 茂 氏（スポーツプロデューサー

元NHKスポーツ報道センター長）

〃 高橋 三千綱氏（芥川賞作家）

〃 ヨーコ ゼッターランド氏（スポーツキャスター）

〃 上治 丈太郎氏（(公財)ミズノスポーツ振興財団 副会長）

※順不同

対 象 者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由：

●「TOKYOオリンピック物語」

(小学館)

野地 秩嘉 (のじ つねよし)

東京オリンピックは、我が国で行われたスポーツ大会の中で最大、かつ最もインパクトが大きかったイベントである。本書は、そのオペレーションに深くかかわった先駆者たちの物語である。この本の主役は日本を代表するクリエイターである故亀倉雄策である。グラフィックデザイナーとして商業デザイン界をリードしてきた亀倉にとって東京オリンピックはまさしく踏切板といえる存在だった。ストーリーの脇を固めるのは、帝国ホテルの村上料理長、日本警備保障（現セコム）の創業者である飯田社長、日本IBMのエンジニア竹下亨。そして映画監督の市川崑は準主役という位置づけになる。ここに描かれる当時の様子は「スポーツ初めて物語」と称するにふさわしいチャレンジングな人間ドラマである。亀倉がリーダーシップをとった世界初の大会シンボルマークの制定と公式ポスターの制作。デザインマニュアルの作成。ピクトグラムの開発。オンラインによるリザルトの配信。いずれをとっても、現代においてスポーツイベントの開催にとって不可欠なものであることに気付かされる。

敗戦からの日本の復興を世界に対してアピールするためのショーケースとしての役目を負っていた東京オリンピックは、新幹線、首都高、モノレールといったインフラの突貫工事を実現させただけでなく、デザインをはじめとする当時のソフトウェアの英知を結集して事に当たる求心力もあったのだ。2016年のオリンピック招致に失敗し、再チャレンジの動きが進行するなかで、「TOKYO1964」を知らない若い世代には特に示唆に富む。多くの資料や証言を駆使した叙述は丁寧で説得力がある好著である。

● 「最後の王者」

(小学館)

西村 章 (にしむら あきら)

オートバイレースで世界最高峰とされるMotoGPの250ccクラスは世界的な不況のあおりでスポンサーが撤退し、2009年のレースが最後となった。日本を代表するライダーである青山博一はこのGPに参加し、緒戦のオーストリアを皮切りに世界各地を転戦、世界の強豪たちとの命を懸けた抜きつ抜かれつの過酷なレースに生き残り、スペイン・バレンシアでの最終戦を征してチャンピオンを獲得する。

その一部始終に密着して息詰まるレースの状況を伝え、合わせて弟の青山周平はじめ、20歳の若さでレース場に散った富沢祥也など、主要な日本人ライダーの群像が描かれる。著者は2輪レースを専門に取材するライターとして国際舞台で真剣に闘いに挑む日本人の若者の等身大の姿をアピールしようと努め、2009年の青山のレースを丹念に追う。レース後には必ず選手たちの言葉を紹介し、適切かつ丁寧に、自分で取材していることがわかる。また、レースを追う流れのなかで、レースで非常に大事なマシンの「セッティング」とは何か、またタイヤと天候の関係、レースのルール説明などをうまく組み込んでおり、構成はなかなか巧みだ。そしてその結果、二輪車レースにまったく無縁の一般読者も興味を持ってついていける読み物になっている。文章は軽快で読みやすく、レースの描写は息詰まるような迫真の展開である。その意味で本書は読み進めるにつれてバイクへの偏見が拭われ、さわやかな読後感を得る作品となっている。

● 「独立リーグの現状」

(産経新聞大阪本社)

編集局運動部

健全経営を可能にする球界再編が急務となっている日本野球界において「独立リーグ」の取り組みが注目される。連載は、その現状から見えてくる明暗を紹介しながら、日本野球のありかたを考える。この作品は、夕刊運動面に7部構成で41回にわたって掲載された。これをすべて一人の記者・喜瀬雅則氏が書いているが、記者のこのテーマに寄せる熱い情熱と取材の努力がよく伝わってくる好連載である。

第1部「そこにある危機」では、独立リーグの「暗」、関西独立リーグの経営撤退、経営破綻などが紹介される。第2部「赤字経営の脱却」では、「明」の事例として徹底した地域密着型で、地域貢献活動に力を入れることで成功した、チームの成功例が紹介される。第3部「真の地域密着への道」では、球団と住民、企業、自治体がそれぞれ利益を得る「win-winの関係」によって経営が安定しつつある近畿・四国の各独立リーグ球団が紹介されている。

第4部「NPB（日本野球機構）との共存共栄」では、プロ野球との共存をはかる取り組みが遅々として進んでいない現実と派生する問題点を浮き彫りにし、第5部「MLB（アメリカ大リーグ）傘下になる日」は国際化の波が押し寄せている現状をとりあげる。第6部「決断への岐路」は国際化のなかで、独立リーグが決断の岐路に立っている背景を明らかにしていく。第7部では「新たな挑戦」として、独立リーグ兵庫と芦屋大学との提携、学生野球憲章にしばられることなく「プロ」と「学生」の交流を可能にしたケースが紹介されている。全体にしっかりした文章と着眼点で構成された記者渾身の連載であり、努力の結晶が実った作品と言える。

以上